～年間連載③～

令和５年12月号より、慶応義塾大学総合政策学部の中室牧子教授による年間連載を開始いたします。教育を経済学的な手法で分析する「教育経済学」を専門としておられ、教育にも科学的な根拠が必要であることを解いておられます。多数のメディアにも出演実績のある中室教授の連載から、さらに幼児教育への理解を深めていただけますと幸いです。

第３回　音楽や美術、運動は必要なのか？

慶應義塾大学
総合政策学部教授　中室　牧子

子どもを持つ保護者の中には、国語や数学など受験に必要な「主要５教科」の勉強こそが重要で、音楽や美術、運動はオマケと考えている人もいるかもしれません。音楽や美術、体育のことを「副教科」などと呼ぶ習慣が残っていることからしても、音楽や美術、体育といった科目の地位の低さをうかがい知ることができます。このため、幼稚園や保育所でも、歌を歌ったり、お絵描きをしたり、運動をするするよりも、計算をさせたり、読み書きを教えたり、英語を教えたりしてほしいという保護者の声が後を絶たないと言います。しかし、私はこうした保護者の要請には慎重であるべきだと考えています。その理由は、一つに音楽や美術は、子どもたちの認知能力と非認知能力の両方を高めることを示した論文が多数発表されており、音楽や美術の経験はとても重要であることが科学的に証明されているからです。まず、音楽が子どもの認知能力や非認知能力に影響を及ぼすことを示した研究は数多く発表されています。カナダで36週間の音楽レッスンを受けた６歳の子どもたちは、（演劇やコンピューターなど）音楽以外のレッスンを受けた子どもよりも35％以上もIQの伸び率が高かったことがわかっています。また、音楽は認知能力だけではなく、非認知能力を高めることを示した研究もあります。ドイツのデータを用いた研究では、小さいころに楽器や歌のトレーニングを受けた子どもたちは、17歳時点での学力が高かっただけでなく、勤勉性や外向性が高かったことが示されています。

美術についてはどうでしょうか。2011年にアメリカのアーカンソー州に新しいクリスタル・ブリッジーズ・アメリカン・アート美術館が建設された際、１年間は無料で入館でき、しかも交通費や昼食まで付くという小学生向けのプログラムが開始されました。応募する学校が殺到したため、このプログラムに参加できるクラスがランダムに抽選で選ばれることになりました。この状況を利用して、定期的に美術館へ行くことの効果を調べた研究は、子どもたちの問題行動が減少し、学校への出席率が高まり、期末試験の成績が向上したと報告しています。同じクリスタル・ブリッジーズ・アメリカン・アート美術館のプログラムのデータを利用した別の研究では、美術館に行くことは批判的思考力、異なる意見を持つ人々に対する寛容さを高めたことも示しており、この効果は特に低所得世帯の児童に大きかったということです。私は美術や音楽教育を専門にしているわけではありませんが、私の共同研究者である美術や音楽教育を専門にしている研究者は常に、絵を描くことや音を奏でることは、「意思決定の連続」だというのです。音楽や美術が認知能力に与える研究については脳科学分野の研究が先行していることからも、おそらく音楽や美術の経験は、脳の活動によい影響を与えるのではないかと考えています。

運動についてはどうでしょうか。運動経験は成績や賃金に良い影響をもたらすだけではなく、学力や学歴を高めることを示した研究も多数あります。ドイツのデータを用いて、３～10歳の時に放課後にクラブでスポーツをした経験があると、小学校の成績が偏差値で1.9高くなることを明らかにした研究があります。この研究では、週１～２回のスポーツをすることで、１週間に30分程度、TVやスマホを見る時間を減らす効果があることもわかっています。つまり「勉強する時間」と「スポーツをする時間」の間で代替が生じるのではなく、勉強以外の、TVやスマホのような「受動的な活動の時間」と、スポーツのように「能動的な活動の時間」との間で代替が生じるのです。

私が幼児期に計算をさせたり、読み書きを教えたり、英語を教えたりすることに慎重な理由はもう一つあります。テネシー州で行われた幼児教育プログラムの効果を検証し、この幼児教育プログラムを実施していたテネシー州の保育所に通っていた子どものほうが、保育所に通っていなかった子どもよりも、小学校入学後の学力が低くなったことを明らかにしています。この理由については、さまざまな議論が行われている最中ではありますが、１つにはこのテネシー州で行われた幼児教育プログラムが、小学校入学後のレディネス（心身の準備性）を重視し、読み書きや計算に力を入れた早期教育を行っていたことから、こうした早期教育の効果はごくわずかの初期の間しか持続せず、すぐにそれをしなかった子どもに追いつかれてしまうということなのではないかと解釈されています。日本の幼児教育は、日々の生活や遊びを中心とした子どもの主体的、協同的な活動を重視しています。多様な体験や経験こそが認知能力や非認知能力を伸ばすというわけですから、幼少期には、子どもを夢中にさせて、遊び込む機会を与えることがとても大事なのではないかと私には思えます。